

卒業前 OSCE の評価からみた助産師教育の課題

大久保友香子, 和泉美枝, 植松紗代, 眞鍋えみ子

【目的】

卒業時の看護実践能力の評価と自己課題を明確にするため与薬援助技術の OSCE を行った。そこで、学士課程における助産学履修者と非履修者の看護実践能力到達状況の比較から助産師教育の課題を検討する。

【方法】

2010年3月にA大学看護学科4年生の希望者17名にOSCEを実施した。助産学履修者は3名(以下履修)、非履修者は14名(非履修)であった。課題は、1:内服介助と点滴患者観察の複数患者対応、2:直腸内与薬の看護とした。2名の評価者により課題1は35項目、課題2は29項目を0~2点で評価し、両者の平均を評価点とした。倫理的配慮は書面と口頭で研究目的及び成績には関係しないことを学生に説明し同意を得た。

【結果】

履修と非履修でMann-Whitney検定を行ったところ、課題1の評価合計点は履修 33.5 ± 3.9 点(得点率; 47.9%)、非履修 35.8 ± 7.7 点(51.1%)で差はなかった。「内服後の口腔内観察」の項目では履修 0.7 ± 0.6 点(35.0%)、非履修 1.8 ± 0.6 点(90.0%)と有意差があった($p < 0.05$)。課題2は履修 40.7 ± 3.8 点(70.1%)、非履修 38.5 ± 4.7 点(66.4%)、各評価項目においても有意差はなかった。履修者は8単位の助産学実習を終えており、高い看護実践能力の習得を期待したが非履修者と同程度であった。

【考察】

助産実践において、助産に特化した知識・技術の習得のみならず看護の基礎的知識や技術の向上を意図した指導の必要性が示唆された。